

## 手話を哲学するための哲学的態度 ——ロールズの道徳的知覚の混乱から学ぶ——

田 中 さをり

### 1. はじめに

近年、哲学の代表的な主題を手話の観点から分析し、これまでの議論に潜む音声言語的制約を相対化する試みがなされている。例えば、直観（高山 & 中山, 2021）や時間（田中, 2021）などが対象として吟味されており、哲学の拡張が試みられている。その一方で、これらの知見を同分野の専門家と共有する上での課題がある。著者はこれまで、手話を主題化する上での哲学者の認識的限界について論じてきた（田中, 2017a, 2017b）。ここで指摘したのは、哲学の伝統的な表現形式が文字であったうえに、十分に手話を言語運用能力として獲得した哲学者が存在しなかったことで、手話に関する知見を十分正確に取り込めてこなかった、という課題である。一方で著者は、異なる身体環境をもつ者に対して働く認識的限界について、「出産する身体」を哲学の文脈で考察する際に生じる課題としても分析してきた（田中, 2023）。ここでは、認識的限界を「他者の感覚や心情は本人にしか知り得ないにも関わらず、当該の人を集合名詞で呼ぶことで、その感覚や心情が容易に理解可能なように振る舞ったり、同じ集合名詞をもつ人の心情と等しく交換可能なように誤認したりすること」と定義している（前掲書：2）。

手話を生活言語とするろう者たちも、こうした認識的限界による誤認に晒されがちなのは共通している。ろう者たちも、その身体が社会の少数派に属しており、このような身体基盤を持たない多数派の人々によって、語りそのものが言い換えられがちであるためだ。

ただ、手話を哲学する上での多数派の人々の認識的限界には、独自の心理的要因が関与していると考えられる。手話という言語の担い手である「聾」という身体を前にして、何らかの負の価値に基づいた心理的制約を感じるならば、その人が第二言語としての手話学習を始めることはそもそも難しく、仮に手話を習得できたとしても、手話から始まる哲学を考察し続けることは難しい。この心理的制約の構造を知る上で手掛かりになるのは、社会正義の枠組みを論じるリベラリズム政治哲学者たちの議論に見られる、障害と「道徳的知覚の混乱」の問題である。本稿では、言語の生物学的基盤と手話の歴史を踏まえた後、現代正義論の代表的論者であるロールズ、セン、ヌスバウムの議論において、「道徳的知覚の混乱」がどのように現れ、解消が試みられ、そして失敗しているかを論じる。さらに、手話に対して働く認識的限界の解明につなげ、哲学者の共同体で手話を哲学することが今後いかにして持続可能か、その哲学的態

度のあり方を探る。

## 2. 言語の生物学的基盤

言語運用に関して、音声と手話では、異なる産出器官と感覚器官が用いられる。音声の構音過程では、話者が肺からの空気による声帯振動で発声の音程を変化させ、さらに舌、軟口蓋、口唇などの運動で鼻腔、口腔、咽頭の形を変えることで母音や子音を構音する。そうした音が受け手の聴覚を通じて意味として聞き分けられる。一方で手話では、話者の手指の形・向き・動きに加えて、頭・顔・肩などの非手指標識 (NMS) の変化が受け手の視覚を通じて意味として見分けられる。音声では発声器官の声帯が一つという制約により、言語は線状的に連なるが、手話の場合は線状性に加えて同時性の特徴をもつ。

学術的には、言語学者のストーカーを筆頭に1960年代から本格的な手話言語学の研究が始まり、80年代には手話失語症の症例研究から、言語機能を担う脳の局在、すなわち左半球の優位性に、音声言語と手話の共通性が見出された。言語機能の局在に関する主要な発見は19世紀に遡り、それまでにフランスの神経学者ブローカとドイツの生理学者ウェルニッケとの発見が知られていた。ブローカは言語を理解できても流暢に話すことができない患者に左半球部位の損傷が見られることを見出し、続いてウェルニッケは、言語を流暢に話せても理解が難しい患者には左半球の別の部位に損傷が見られることを示した。これらは音声言語話者を対象としていたが、手話の失語症も解明が進み、音声言語のブローカ失語とウェルニッケ失語と似たものであることが示された (Poizner, Klima & Bellugi, 1987=1996)。この発見は、ウェルニッケらの研究で音声言語の機能局在が判明して1世紀あまりが過ぎた頃、たった30年弱の手話言語学の積み重ねをもとに成し遂げられた。この研究に尽力した神経生物学者のベルージュについて、昨年、ニューヨークタイムスの追悼記事は次のように伝えている。「ベルージュ博士はアメリカ手話を対象としたが、世界に100以上ある手話言語の言語体系が世代を超えてろう者たちの間で複雑なまま受け継がれていることを明らかにした」(Seelye, 2022)<sup>1)</sup>。近年では、機能的脳活動の画像化技術が発展し、ブローカ野に加えて運動前野外側部 (LPMC) が「文法中枢」として機能する可能性が示され、日本手話の話者を対象とした研究では、ブローカ野が文レベル、LPMCが単語レベルの情報統合を行っていることが示唆されている (Inubushi & Sakai, 2013; 山田 & 酒井, 2017)。さらに、脳のブローカ野が出現した250万～200万年前頃のヒトの発声発語器官には、音声言語を操る解剖学的・神経学的条件が整っていなかったことから、手話が音声に先立ってブローカ野で処理されていたのではないかと推測する耳鼻咽喉頭科学の報告もある (中澤, 2022)。ただし、仮に人類の祖先が皆手話話者であったとしても、音声言語話者が手話を第二言語として獲得することの難しさは変わらないだろう。社会の多数派である「聴者」が手話を習得することは、決して不可能ではないものの、現実には長い年月を要する

ためだ。

その一方、手話の担い手であるろう者たちは、社会からの偏見や差別の対象になってきた。聴者の心理的制約は、音が聞こえないことに対する不安と、音を通して得られる情報に最優先の価値を見出す信念に起因する。この信念により、「聾」という身体を「聴覚＝言語の受容器官」が欠けた「不完全な身体」として見なす観念が、無自覚に形成される。このような観念は、近年「オーディズム (audism)」として批判がなされており、例えば、ろう者学の研究者バウマンは、歴史的・哲学的観点でオーディズムを考察し、「人間のアイデンティティと存在を、音声で定義づけられた言語と結びつける傾向」について、「形而上学的オーディズム」として批判している (Bauman, 2004)。バウマンは、20代で最初にコロラド盲ろう学校の寮に赴任した際、初めて自らを「白人」や「男性」に加えて、「聴者」というアイデンティティをもつ者として自覚したとともに、大学時代に専攻した文学には手話の知見が欠落していたことに気づいたと述べている (Bauman, 2015)。手話の知見が欠落しているのは文学に限らず、哲学も同様であり、その要因の探究が求められている。

### 3. 手話の歴史

手話の歴史は各国で記され、その多くは日本語にも訳されている。そうしたいくつかの書を紐解けば、世界各国でろう者たちは生まれ、家庭や地域共同体、学校制度による集団で手話を継承してきたことがわかる。世界で初めて聾教育が始まったのは18世紀のフランスである (以降レイン, 2018)。1760年に神父のド＝レベが自宅を開放してろう児の個人指導を開始し、同校は1791年に国立パリ聾学校になる。この間にフランス語教授のための「方法的手話」が開発され、フランス語の文法とその文化資源にろう児がアクセスできるようになった。ド＝レベ神父の公開授業には当時の教養人が詰めかけ、この背景にはロックやコンディヤックの感覚を基にした経験論が影響したといわれている。一方で、この新しい方法的手話とは独立に、ろう者たちの伝統的手話であるフランス手話が存在し、今日に至るまで継承されている。ろう者たちの集団を形成することでフランス手話の言語継承を間接的に促した聾学校は、その同じ場で、聾という身体の治療教育の機能も伴っていた。「アヴェロン野生児」の教育で知られる医師のイタール (Jean Marc Gaspard Itard, 1774–1838) は、1800年にパリ聾学校に赴任して以降、「聴覚障害」の治療に乗り出し、生徒らに瀉血を試みたり、鼓膜に穴を開けたりするなど、治療を名目とする劣悪な外科手術を度々行った。また、イタールは児童の手話使用を禁止して談話を促す「純口話法」による教育も推し進めていた。

フランスの純口話法の内実について佐野 (2006) は、純口話法とナショナリズムとの親和性から、「国語」による近代国家国民体制の樹立のために、聾児の教育が「究極のモデルケースの役割」を果たしたと指摘している。ナショナリズムと純口話法の親和性は、フランスに限

らない。昭和初期の日本においても同様に、聾児に声で話させる教育を成功させることを通して帝国日本の拡大が目指された（田中, 2017b）。近代日本の聾教育と植民地支配の関係を思想的観点で分析した本多（2003）は、この時代のろう者たちは「内地にいる「国民」として「国語」教育を受けていたのではなく、内地にいる植民地の人々として、手話を禁じられ「国語」を強制されていた」（傍点原文、前掲書：49）と指摘している<sup>2)</sup>。またイギリスにおいても、ろう者たちの歴史を脱植民地化の視点で捉え直す研究が進んでおり、ろう者学研究者のラッドは、口話教育の締め付けが増すにつれ古い文書や芸術品が処分された結果、「年配のろう者が体現した物語や伝統は引き合いに出されず、今の時代のろう者の状況が生きた歴史を構成するという考えは消え失せた」と述べている（ラッド, 2007: 291）。

このような社会的抑圧と隣り合わせて継承されてきた各国のろう者たちの手話は、近年、消滅危機言語となりつつある。現在、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）の危機言語リストは音声言語のみを対象にしており、手話は含まれていないものの、研究者の間では警鐘が鳴らされている。UNESCO と英国危機言語基金（Foundation for Endangered Languages）及び英国セントラル・ランカシャー大学国際ろう者学研究所（International Institute for Sign Languages and Deaf Studies, University of Central Lancashire）が行った世界の15の手話に関する共同調査報告は、「絶滅の危機に瀕している手話は、支配的な音声言語に加え、支配的な手話からも脅威に晒されている可能性があり、人工内耳のような技術的変革が音声言語よりも直接的に手話に影響を与えている」と指摘している（Safer & Webster, 2014: 5-6）。日本手話の状況については、補聴器や人工内耳の技術的発展に加え、障害児の差別的隔離を撤廃するインクルーシブ教育を背景とした聴覚障害児教育でのインテグレーション指向が日本手話の消滅シナリオとして指摘され、将来的には遺伝子診断と遺伝子編集も脅威になると予想されている（高嶋, 2020: 145）。

さらに、手話に関連する法制度に目を向けると、日本の障害者基本法は、2006年に国連の障害者権利条約で手話が言語として明記されたことを受けて2011年に改正され、次の規定が新しく追加されている。「全て障害者は、可能な限り、言語（手話を含む。）その他の意思疎通のための手段についての選択の機会が確保されるとともに、情報の取得又は利用のための手段についての選択の機会の拡大が図られること」。これにより、現在、全国の自治体で手話言語条例が制定され始めている。しかし、ろう学校では日本語教育上の方法的手話である日本語対応手話（手指日本語）が通常用いられ、ろう者の教師が日本手話で児童生徒と会話することが認められない学校もある（戸田, 2016: 45-46）。また、ろう学校を卒業した後も、不十分な通訳によって意図しない医療行為を受けたり、不利な判決を受けたり、学術的な情報を得られないままになっているろう者も少なくない（Sugimoto & Mori, 2019: 110）。日本政府は障害者権利条約をはじめ、言語権に言及した他のいくつかの国際人権条約の締結国であるものの、そもそも日本国憲法は社会の少数派が言語権を期待することを想定しておらず、個人が権利保護の

ために国際社会に訴える手続きすら一貫して停止されたままである（前掲書：105）。

「聾」という身体を音声言語話者に近づける近年の技術的・教育的努力は、これまでかろうじて維持されてきた手話の継承を危ういものにしており、ろう者たちの生活上の障壁は高いままである。しかし、手話をめぐるこのような状況は、歴史や思想を含め、文学部などの基礎教養で教えられているわけではない。手話に関する研究成果は一般向け科学雑誌でも度々取り上げられることがあるが、人文科学者の間で話題になることはそれほど多くはない。パウマンは形而上学的オーディズムの存在を指摘したが、手話を専門としない人文科学におけるこれらの知見の欠落には、さらに根強い拒絶の構造があるように思われる。ここで問うべきは、そもそもなぜこうした拒絶が多くの人々に——とりわけ哲学者に根強く——生じるのかであり、反省的に捉え返される必要がある。

ここで少し想像してみたい。この音声優位社会で、手話やろう者の歴史について全く知識のない聴者が、ろう者に初めて出会ったとしよう。目の前にいる人は確かに人ではあるが、音には反応を示さず、手を動かして会話をしようとしている。音声を聞き分けて言語を理解する人間がこうした全くの異者と出会った際に起こりがちなことの一つは「混乱」である。相手が自分と同じ人であることと、自らが当たり前に信じていた「言葉を聞き話す」という条件を満たす人ではないことの矛盾を処理できない局面で、次になすべき行動がわからない。実はこの「混乱」は、障害のある者を目の前にした「道徳的知覚の混乱」として、ロールズ（John Rawls, 1921–2002）が哲学史上初めて言及した事態である。この「道徳的知覚の混乱」は、ロールズ以降の現代正義論の代表的な論者により解消が試みられつつも、完全には解消されないまま形を超えて残り続けている。哲学者の手話への拒絶をもたらす心理的要因を探るために、この「道徳的知覚の混乱」を手がかりにしていきたい。

#### 4. 社会的基本財と潜在能力

「道徳的知覚の混乱」は、ロールズが最初に用いた言葉であり、自分とは全く異なる存在に対する心理的障壁が率直に記されたものである。この混乱は、ロールズを批判したセン（Amartya Kumar Sen 1933–）やヌスバウムの議論（Martha Craven Nussbaum 1947–）にも見て取れる。まずは3者の議論の背景から確認する。

現代正義論の代表的な論者である3者の議論の核には、「人々の間で何を平等にしたら個々人の幸福が達成できるのか」という問いがある。この問いに対して、ロールズは社会的基本財（primary social goods）を想定する。これは「合理的な人間が他に何を欲しようとも、必ず欲するだろうと想定されるもの」であり、「権利、自由、機会、権力、収入および富」に加えて「自尊心」（Rawls, 1999a: 79=2010: 124）が例示される。社会制度としてこれらを平等にする仕組みを作れば、社会を構成する個々人が幸福を追求し、達成できるような社会を実現でき



るだろうというわけだ。これに対してセンは、基本的潜在能力 (basic capability) という新しい指標を打ち出す。ロールズの基本財アプローチでは、特に身体に障害のある人が社会参加する際に生じる障壁は解決されないままになると考えたためだ。潜在能力の一例としてセンは、「共同体の社会生活に参加する機能などの能力」(Sen, 1989: 253) を挙げている。

これを四肢に障害のある人の問題に即して解釈してみると次のようになる。例えば、車椅子の使用者である A が、スロープのない建物内にあるイベントに参加できない場面を考えてみよう。A には参加費を払うのに十分な経済力があるとする。ここでロールズ流の基本財の経済的困窮だけを支援の対象とする社会では、A の困難な状況を正しく評価することができない。しかし、潜在能力に注目すれば、建物のデザインに起因してイベントに参加するという行為を自由に選択できていない状態と解釈され、支援のニーズを検知することが可能になる、というわけだ。

ヌスバウムの潜在能力アプローチも、センの路線を基本的に踏襲したものであるが、その違いは、どのような文化や社会背景にあっても同じ潜在能力のリストを使うという点にある。加えてヌスバウムは、知的な障害がある人々にも同じリストを用いて社会に包摂する制度設計の必要性を強調する<sup>3)</sup>。

以降、ロールズが最初に述べた「道徳的知覚の混乱」がいずれの論者においても完全には克服されないまま残っていることに焦点を絞って確認していく。

## 5. 道徳的知覚の混乱

「道徳的知覚の混乱」について、ロールズの最初の記述から見ていこう。

私はまた、全ての人々が正常な範囲内にある身体的ニーズと精神的能力をもっていると想定しているために、特別なヘルスケアの問題や精神的な障害をもつ人々 [the mentally defective] をどのように扱うかについての問題は生じない。正義論をこえたところへ我々をつれていくような困難な問題を早まって導入することに加えて、これらの困難なケースについて考えることは、しばしばそうした人の運命が同情と不安を引き起こすような、我々とかけ離れた人々について我々に考えさせようとすることで、我々の道徳的知覚 [moral perception] を混乱させてしまう。しかるに正義についての第一の問題が関与しているのは次のような人々である。正常な道をたどる社会における十分に活動的な参加者であり、生まれてから死ぬまでに直接的あるいは間接的に結びついているような人々との関係に正義の問題が関与しているのである (Rawls, 1999b: 259)。

ここでロールズは、正義にかなった社会設計について議論する際、その前提となる対象は、

「正常な道をたどる社会における十分に活動的な参加者であり、生まれてから死ぬまでに直接的あるいは間接的に結びついているような人々」だと考えた。「特別なヘルスケア」が必要な人や「精神的な障害をもつ人々 (the mentally defective)」は、この議論から留保されたわけである。なぜならそうした人々のことを考えると不安に苛まれ、通常の道徳的判断が不能に陥ってしまうからだ。このロールズの記述について、経済学者／哲学者のセンは次のように反論している。

[ロールズは]「難しい事例はそうした人の運命が憐憫と不安をよび起こすわれわれとは隔たった人々のことを考えざるをえなくすることによって、われわれの道徳的知覚 [our moral perception] を混乱させることになりうる」と書いている。それはロールズのいう通りかもしれない。が、難しい事例は現実存在しているのだから、身体上の疾病、特別な治療のニーズや心身の欠陥といった事柄が、道徳的に重要な意義を有していないなどに見えたり、間違いを恐れるあまりにそれらを考慮の外におくことは、必ず逆の意味で過ちを生じさせるに違いなかろう (Sen, 1989: 249)。

人間の多様性を踏まえて、センは正義の問題が関与する人間の範囲をロールズの想定するそれから拡張しようとした。しかし、このセンの見解は必ずしも一貫しているわけではない。見解の揺れが見られるのは、潜在能力アプローチの批判者であるコーエン (Gerald Allan Cohen, 1941–2009) との議論においてだ。コーエンは、センの基本的潜在能力のアプローチに対して、「強健主義 (athleticism)」的だと批判した (Cohen, 1993)。センの考えでは、個々人ができないことを公の力でできるようにすることが道徳的に正しい行為だということになり、いくら「できること」が基本的なものであるとしても、それができない者は、何とかして「できるようになること」へいつも急かされている感じがしてしまうためだ。赤ちゃんはケープビリティのようなものを考えなくても、回りの大人たちによって適切に保護されることですくすく育っていくではないか。平等にすべき対象の指標として潜在能力は適切ではないのではないか。コーエンはセンにそう迫る。これに対するセンの応答に注目してみよう。

自由の能動的な行使は人間の生活の質やよき生の達成のために当然価値あるものであろう。明らかにこの考察は、赤ちゃんのケース（あるいは知的障害者 [mentally disabled] のケース）には直接関連性を持たないであろう。そのような人々は、分別ある選択の自由を行使する立場にはいない (Sen, 1993: 44)。

センは、ロールズが除外した人々を自らの理論の中で取り込むことを試みたにも関わらず、ここで自由の能動的行使ができない人々を議論の対象から除外している。すなわち、自由の価

値を人間本性に定義づけることを優先し、赤ちゃんと知的障害者はその定義の外側に留保したわけだ。

一方、現代正義論の代表的な論者の一人、ヌスバウムは、知的障害者を正義論の枠組みに包摂するために潜在能力アプローチをさらに洗練させている。ヌスバウムの議論には、脳性麻痺や自閉症やダウン症などの障害のある子どもたちの固有名が登場する。それぞれ、セーシャ、アーサー、ジェイミーである。このように固有名を使って社会正義が前提とする対象を拡張する手法は斬新である。また、ヌスバウムは、知的な障害のある人々に別種の潜在能力リストを用いることに反対しており、「我々とは異なる集団」として烙印を押して個別の多様性に目を向けようとしないうことを批判している<sup>4)</sup>。このことは、本論冒頭で示した「認識的限界」の考え方と重なり、この限界がもたらす問題に目を向けようとしている点については、本論の立場からも評価できる。しかし、そのヌスバウムの潜在能力アプローチには大きな課題がある。無脳症の人や植物状態の人を自らの議論の対象から留保しているためだ。ヌスバウムの見解を確かめてみよう。

持続的な植物状態にある人、あるいは無脳症の子どもを、人間と呼ぶように私たちを導くのは感情だけである。私たちがセーシャの生を人間的なものと呼びたいと願うのはなぜだろうか？ もちろん、彼女が人間の身体を持っており、かつ二人の人間の子どもであるという事実が大きく働いて私たちの思考を歪めているのかもしれない。彼女の生は何か別の種類の生であって、人間という言葉が比喻以上の意味をもつほどには人間の生の形には似ていないという可能性は一蹴すべきものではない。このような言い方は、持続的な植物状態と無脳症の子どもという先に言及した事例においては適切である。なぜなら、意識的な働きかけや他者とのコミュニケーションの可能性が皆無であるからだ。私たちがセーシャの生を人間の生であるとまさに考える限りにおいて——その際私たちは欺かれているわけではないだろう——それは恐らく、少なくとも最も重要な人間の潜在能力のいくつかがそこに現れているからであり、またそれらの潜在能力、つまり他者を愛し、他者と関わり、知覚し、動いたり遊んだりすることに喜びを見いだすことが、彼女を、何か他のものではなく、人間共同体に結びつけているからである。(Nussbaum, 2007: 187-188)

ここで言及されているセーシャは、先天性脳性麻痺と重度の精神遅滞があり、日常的には誰かに服を着せてもらい、身体を洗ってもらい、セントラル・パークに行くのに車椅子に乗せてもらう必要があり、両親とフルタイムの介助者のケアを受けている。ここでヌスバウムは、慎重に言葉を選びながらも、無脳症の人や植物状態の人とは異なり、セーシャの生を「人間の生」と考えるのは妥当だと主張している。なぜなら無脳症の人や植物状態の人を「人間」と呼ばせるのは感情 (sentiment) でしかないからだ、と。



このヌスバウムの主張は問題が多い。第一に、「意識的な働きかけや他者とのコミュニケーションの可能性が皆無であること」を立証することは難しいこと。医学的に遷延性植物状態 (Persistent Vegetative State: PVS) と呼ばれる病態は、誤診率が4割にも上ることが知られている (戸田 & 松田, 2018) ためだ。第二に、植物状態の人を人間と呼びたい「感情」は、医療的ケアを持続させ、それにより患者が回復することもありうる。第三に、患者が長期に渡って今後も意識が回復しないとしてもケアし続けたいと考える家族の存在を想定せず、人としてケアする思いを「感情でしかない」と一蹴することは、患者家族を社会の周縁に追い詰めることになりうる。第二と第三について、日本で長らく意識障害をめぐる問題を哲学的に分析してきた戸田は、「意識」が社会的構築物であることを強調しつつ、患者に意識がないのではなく、意思疎通が阻害されたコミュニケーション障害とみなしてケアが持続できる医療施設の重要性を指摘している (戸田, 2011)。

ヌスバウムが理想とするリベラルな社会では、一人一人の自由な人間の潜在能力が、人としての「善き生」を定義づけるものである。ここで問題なのは、「意識的な働きかけや他者とのコミュニケーションの可能性」が皆無であることが、潜在能力の潜在性が全て否定される事態と見做されており、その生のあり方が「人間の生ではない」と価値判断できると考えられていることだ。人として善く生きるための潜在能力の「潜在性の無さ」を「意識的働きかけの可能性が無い」ことに求めることは、そもそも客観的判断が難しく、患者本人の生命や家族の尊厳を一方的に奪うリスクがある。

加えて、観察者によって一方的に規定された潜在能力のあり方を通して人の生を規定することは、その先に予想されることがある。多くの人々によって不運と見做される状態は、それを改善するための治療体制を社会の中を整備し、未来に発現することが見込まれる不運な状態を予防して取り除くことも推奨されるようになる、ということだ。ヌスバウムはこの点について次のように述べている。

誰かがそれら [潜在能力のいずれも] を持たないとき、それが誰かの責任であろうとなかろうと、不幸な事態である。セーシャが開花しうるとすれば、その唯一の仕方が、人間としてである。これはセーシャの生があらゆる面で善き生であるとは、また立派であるとは見なし得ない、という意味ではない。もし彼女の症状が治療可能で、潜在能力の閾値まで引き上げることができれば、そうすべきであるという意味だ。なぜなら、人間がそのように機能を発揮することは善いことで、実に重要であるからだ。もしそのような治療が可能になるはずであれば、社会はその費用を支払う義務を負うであろうし、「生まれつきの障害だから」という言い訳はできなくなるだろう。さらに、もし子宮内で遺伝子进行操作して、彼女がそれほど深刻な障害をもって生まれてこないようにできるのなら、それもまた、まっとうな社会がすることである。ここでジェイミーとアーサーについては

そのようなことは述べないことに留意されたい。なぜなら彼らには、人間にとって中心的であると本書で評価してきた潜在能力を獲得する現実的な見込みがあるからである。したがってこの見解は、ダウン症候群やアスペルガー症候群、あるいは目が見えないことや耳が聞こえないことを遺伝子操作によって取り除くことを伴うものではないが、それをはっきりと拒否しているわけでもない。(Nussbaum, 2007: 193, [ ] の補足と下線は引用者による)

ここで注目したいのは、他者とのコミュニケーションを通じた結びつきを重視するヌスバウムの議論において、潜在能力による人間の規定とその評価に伴って、ある種の人間には治療が推奨されていることだ。障害のある人々にも同じ一群の潜在能力を適用させ、社会に包摂しようとするヌスバウムは、できる限り多くの人を包摂してその能力を開花させるために、脳性麻痺や精神遅滞の治療や、遺伝子の操作による予防があって然るべきだと考える。ここで、ダウン症やアスペルガー症候群の人々、視覚障害や聴覚障害の遺伝子操作による予防について推奨はしないものの、明確に否定もしない。こうした恣意的な線引きは、持って生まれた身体のまま生きたいと願う人々にとって大きな脅威であろう。何が人間の善き生にとっての潜在能力なのかを定義したまさにその同じ人間が、治療や予防が必要な対象者を決めるのだから。ロールズ、セン、ヌスバウムは、共に自由を至上とするリベラリストであるが、各自が前提とする人間と非人間の線引きは、各々が人間本性に欠かせないと信じる価値に基づいて決められている。そこで示された価値がどれだけ妥当であるか、議論は未だ十分ではない。

## 6. 人間留保の二つの型

ここでロールズを批判したセンやヌスバウムの議論に見られるある種の人間の留保は、「道徳的な知覚の混乱」を解消しようとした帰結だと見ることもできる。「道徳的な知覚の混乱」の二つの型を次のような発言として考えてみたい。

- (1) ロールズ型：「私はXに障害のある人に接すると、憐憫と不安の感情に飲まれて正常な判断ができなくなる。このため、Xに障害がある人についてはこの議論からは除外し、ひとまず留保しておこう」。
- (2) セン／ヌスバウム型：「私はYに最優先の価値を見出しており、Yが欠落した人を議論の対象に含めることで、Yのもたらす価値が見えにくくなってしまう。このため、Yが欠落した人についてはこの議論からは除外し、ひとまず留保しておこう」。

ロールズの場合は $X = \text{「精神」}$ で、身体的・知的な障害のある者が留保対象となった。センの場合は $Y = \text{「自由な選択ができる知性」}$ で、身体障害者が包摂され、乳幼児と知的障害者が留保対象となった。ヌスバウムは $Y = \text{「普遍的な潜在能力」}$ で、知的障害者が包摂され、無脳症の人や植物状態の人が留保対象となった。このような特定の人々を除外して社会構築の議論を進める行為は、「道徳的知覚の混乱」が完全に解消されないままであることを示している。目の前の人の生を、自分と同じ「人間の生」と判断できない、同じ混乱の作用であるだろうからだ。この混乱を解消するために、社会の多数派による「温情」によって人間たる対象を拡大しようとするヌスバウムの路線には限界がある。第一に、恣意的に規定された人間本性の機能を開花させることが優先されるあまり、現在存在する全ての人々の基本的人権が見過ごされてしまう。第二に、(恣意的に規定された人間本性が欠けた不運な)当事者からの権利主張がなされた際に、合理的配慮の保障を難しくする。第三に、治療と増強の線引きを曖昧なものにしてしまう。では、これらが「聴覚障害」の問題としてどのように現実に見られるか、順に見ていきたい。

## 7. 温情の限界

第一の基本的人権について、この社会には、上記の2つの例文において、 $X$ も $Y$ も共に「聴覚」と考える人が少なくない。音声を聞き分けて会話する人が社会の多数派であり、公共交通機関も音声アナウンス中心で運行している。家庭には電話や音声アシスタントの技術が備え付けられ、音楽を含めて身の回りにはありとあらゆる音が溢れている。音は電話の発明によって空間の制約を超え、録音技術によって時間を超え、ボーカロイドによって人格をも超えつつある。既にこの現代社会には「音が生み出す価値」が言語・文化・法制度に至るまで根強く浸透している。道徳的知覚の混乱は、こうした価値に根ざした言語体系の中で、音声とは別の言語を用いる異者に遭遇した際に生じる。この混乱を解消するために、目の前の異者を「温情」によって既存の社会に適合する形で包摂しようとする、手話を生活言語とするろう者の人権は、治療や矯正を目的とした教育の影に覆い隠されてしまう<sup>5)</sup>。

第二の合理的配慮については、手話での情報保障が個人の温情によって対応できそうもない場合に生じる。例えば現代においても、イベントの参加者が手話通訳による情報保障を主催者に依頼した際に、経済的コストが見合わないことを理由に拒否されることも少なくない。温情という感情は、困っている人に手を差し伸べたいと思わせるものだ。しかし、手話通訳は専門技術であり、誰もが簡単に対応できるわけではない。専門の手話通訳士に依頼する必要があるが、当然ながら費用が発生する。この場面において、手話を日常言語とする人の「知る権利」は、主催者側で対応可能な能力とコストの範囲に制限される。ここで個人の力量では助けられないことは、社会制度を充実させることで解消されるだろうか。世界的潮流として、手話通訳

ではなく、人工内耳技術を発展させる方向での解消が危惧されている<sup>6)</sup>。また、ヌスバウムが敢えて否定しなかったように、重度の聴覚障害者は技術的に子宮内での早期発見・早期治療を実現させ、妊娠の継続の判断を妊婦が選択できるようになることが目指される未来も予想できる。こうした次世代技術への投資が進む一方で、聴者が手話の技能を身につける機会を拡充するためのコストが後回しにされれば、今まさに手話による合理的配慮を必要としている人には支援が届きにくくなってしまふ。技術哲学者のシューは、先端的な技術によってできることが増えると障害者に言い募る一方で、理想的な心身のあり方や、誰が価値ある者かについて能力主義者 (ableist) が用いる比喻が強化されることを「テクノエイブリズム (technoableism)」と呼んで批判している (Shew, 2020: 43)。このようなテクノエイブリズムの視点すら覆い隠してしまうのが温情の第二の限界である。

第三の治療と増強の線引きに関して、自分と異なる人々に対して、不運な状況にあると捉えて社会に包摂した場合の問題は、「正常な身体」への望ましい回復という規範意識に基づいてなされた医療行為としての「治療」が、当人にとっては、「増強」でありうることだ。例えば、作家で弁護士でもあるキムは、普段は車椅子を用いて生活している。キムは障害当事者の人権運動家たちの発言を丹念に考察するなかで、彼らは障害の「治療に反対しているのではなく、実は増強に反対している」と述べている (キム & キム, 2022: 183)。キムの例では、視力を0.5にするのは治療だが、3.0にするのは増強である。この指摘は、センに対して「強健主義 (athleticism)」的だと批判したコーエンの主張とも重なる。これを聴覚障害の問題に引き付けて見れば、ろう者として誇りをもって生きる人に対して聴覚の治療を一方的に試みることは、本人にとっては不要な増強になりうるということが理解可能になるはずだ。しかしヌスバウムの議論に見られる温情の感情は、人としてあるべき潜在能力の普遍性を重んじるあまり、この視点を覆い隠してしまう。センとヌスバウムの潜在能力アプローチは、人間の安全保障として紛争化での国際人道支援の介入を正当化する根拠として使われており、この場合、介入によって当事者の生存確率は上がるかもしれない。しかし、同じアプローチを障害に対する治療・矯正・予防の正当化に用いることは、人の未来のあり方に不可逆的に踏み込むことであり、より慎重でなければならない。

## 8. 障害に対する反実仮想

さて、これまで見てきた「温情」という感情は、哲学者の間で議論されてきた抽象的な正義論のなかにだけに現れるものではない。障害をめぐる人々の日常的な言葉遣いのなかに極めて頻繁に見られるものである。注目したいのは、この温情が他者の障害に対して働き、表明される際、反実仮想的な見方とセットになっていることである。例えば、温情は次のような言明で象徴的に表れる。「あなたにこのような障害がなかったなら、きっともっと幸せだっただろうに」。

不憫なことだ」と。この憐憫の表明をさらに細かく分析すると、次のような複数の段階を踏んでなされていることがわかる。

- (1) 人間の種としての標準形を想定する。
- (2) 今現実にあるその人の身体や知性を標準形と比べて差異を確認する。
- (3) 人としてあり得たはずと仮定される標準形の可能性を高く評価し、現実のあり方を低く評価する。
- (4) 現実のあなたは不遇な状況化にあり、可能であるならば身体に属する不遇な特性は治療により取り除くべきだと考える。
- (5) 同じ境遇に生まれてくる可能性の高い胎児も子宮内で予防的に治療すべきだと考える。

ここで(1)と(2)はほぼ無意識になされる。(2)を經由して(3)の時点で、もしロールズ的な人ならば、自分が不遇だと感じた人のことは留保した社会設計を考えるであろう。もしセンやヌスパウム的な人ならば、温情に基づいて不遇と感じられる人を包摂する社会設計を進めるであろう。さらに(3)から(4)を経て、自分が不遇と感じられる人が将来生まれないように予防の手段を整えるだろう。いずれにせよ、「善き生」が本質主義的な規範概念である限り、温情による治療・矯正・予防の行為は、その根拠を反省する機会もないまま、ノンストップで継続される傾向にある。できる限り目の前の異者を従来の人間の型に近づけて意思疎通を図ろうとすることが、善なる行為として判断されるからだ。

上記の段階において、どこでどのような間違いが生じているのかを特定することは、それほど難しいことではない。経験的に自分と近しい人の特性や、自分が属する社会で流通している言葉遣いの中で抽象化された人間の型を、「正常な人間」のモデルと考え(1)、その型から外れた人を「不遇な障害者」として価値判断している(2)(3)、にもかかわらず、障害という負の価値が、目の前の人に予め内在していると誤認した時点だ。この誤認の心理をより細かく見ていくと、この観察者がもって生まれた身体環境と、その身体環境を標準形とする社会環境を基準として、仮に今私の聴覚が失われたら極めて不幸な事態になると反実仮想的に想像されることを、目の前の他者に投影することで生じていることがわかる。勝手に投影された相手が本来的に不幸な人とみなされることを強く拒絶しても、多くの場合、当人が投影の幻想から覚めることはない。これが反実仮想の誤謬である。一方で、ろう者の身体環境には、その文化的資源としての手話とコミュニティがある。手話から始まる哲学を通して、哲学の概念に含まれる音声言語的制約を相対化する可能性も開かれている<sup>7)</sup>。それでも、人として重要な機能が欠落した不幸な状況として「聾という身体」を見做し続けるならば、それは理解ではなく、反実仮想に基づく自己投影である。この投影による誤認は、社会の集団的無知によって強化され続けるため、自覚されづらい。ろう者たちの歴史を見ても、その歴史が広く人文科学の研究者によって



顧みられることのないまま、手話への抑圧は形を変えて繰り返されている。だからこそ、この「自覚」が哲学的態度としていかに重要であるか、強調してもし過ぎることはないはずである。

## 9. おわりに

ここまで、手話を哲学の対象とすることについての心理的制約の構造を探るため、現代正義論の代表的論者による「道徳的知覚の混乱」が解消されずに残り続けている構造を見てきた。これにより、「道徳的知覚の混乱」の解消の失敗は、「温情の限界」や「反実仮想の誤謬」として現れることを示した。本論冒頭で、異なる身体環境をもつ者に対して働く認識的限界について、「他者の感覚や心情は当人にしか知り得ないにも関わらず、当該の人を集合名詞で呼ぶことで、その感覚や心情が容易に理解可能なように振る舞ったり、同じ集合名詞をもつ人の心情と等しく交換可能なように誤認したりすること」と示した(田中, 2023)。ここまでの議論から、手話を哲学する上での認識的限界として新たに加えられるのは、「自分が信じる人間の型から外れた人を「不遇な障害者」として価値判断しているにもかかわらず、障害という負の価値が、目の前の人に予め内在していると誤認すること」であろう。

ここで一つだけ、前向きな観点として提示しうるのは、ロールズのいう「道徳的知覚の混乱」、すなわち前節の(2)と(3)の間で異者を目の前にした時点こそが、自分とは遠く隔たった異者の身体環境に近づき、誤認を誤認として自覚できる唯一の機会になりうる、ということだ。この混乱を解消すべく何らかの温情が働いて、社会のコストを下げる形で異者を一方的に包摂／同化／予防したり、反実仮想が働いて自己投影する誤謬を犯したりする前に、自らの無知をいかに自覚できるか。これこそが現代を生きる我々の哲学的態度が真に試される局面であろう。この無知を無知のまま放置しておくことが、現実に対する認識を、大きく歪める源泉であるのだから。

## 注

- 1) 2005年に千葉大学で開催された日本手話学会の基調講演にベルージ博士をご招待した際、著者はアテンダ係として博士の聲咳に触れる機会に恵まれた。博士は日本の盲ろう者の間で使われている指点字(東京大学の福島智教授の母、令子氏考案)に強く関心を示し、専門とする学生にその仕組みについて熱心に尋ねられた。
- 2) 実際に「内地」の聾学校での口話教育は、植民地化にあった台湾の日本語教育や、さらには台湾の聾学校での実践にも活かされていた(本多, 2002)。
- 3) ヌสบaumは次のように述べている。「我々は障害のある人々をあたかも別の(かつ下級の)種類に属する者として区別して追いやるのではなく、善き生に必要とされる手段に対して彼らが平等な権原をもつことを強く求める」(Nussbaum, 2007: 191)。
- 4) ヌสบaumは次のように述べている。(社会的烙印を押された)「そのような人が人間の暮らしの中で一番まともな行動を取ると、「健常者」はまるで「すごい! ある意味で人間みたい!」とでも言わんばかり

に驚きを表明することがよくある。仮に私たちが両者を異なる種であるかのように、「健常者」には潜在能力リスト、「ダウン症候群の子ども」には別種のリストを採用するとすれば、この有害な傾向を強めることになるだろう。そこには「健常者」こそ個々の人であり（彼らは自らが個であるとわかっていて、誰もそれを否定しない）、ダウン症候群の子どもたちは特に大きな個性や多様性のない——その類型としての特性によってもっぱら定義された——型であるという、嘆かわしい含みが生じてしまう」（Nussbaum, 2007: 191）。

- 5) 近年、札幌聾学校において日本手話での教育が停止され、児童の「教育を受ける権利」が侵害されたとする訴訟が2例続けて起きている。
- 6) ろう者の言語と文化に関わる組織代表者の座談会の中の、全日本ろうあ連盟の久松三二氏と日本手話学会の末森明夫氏のやり取りで、オランダやベルギーでは手話通訳のコストを削減するために人工内耳を無料化する政策が取られていることが言及されている（佐々木, 2012）。
- 7) 著者が行った手話でのインタビューと哲学対話についてそれぞれ参照されたい。
  - ・根本和徳氏インタビュー、「文の心象風景を手話で再現する」<http://philosophy-zoo.com/archives/6902>,
  - ・根本和徳氏、久保沢寛氏、皆川愛氏との哲学対話、「手話で記憶を再現する方法」<http://philosophy-zoo.com/archives/7056>

## 参考文献

- Bauman, H. D. L. (2004). Audism: Exploring the Metaphysics of Oppression. *The Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 9(2), 239–246. <https://doi.org/10.1093/deafed/enh025> [オーディズム：形而上学から見る抑圧の探究, 山下恵理, 皆川愛, 高山亨太訳, ろうなび, 2022]
- Bauman, H. D. L. (2015). *On Becoming Hearing: Lessons in Limitations, Loss, and Respect TEDxGallaudet*. TED. <https://youtu.be/yCuNYGk3oj8>, accessed on 2023. 1. 28
- Cohen, G. A. (1993). Equality of What? on Welfare, Goods, and Capabilities. In Nussbaum, M. & Sen, A. (Eds.), *The Quality of Life*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/0198287976.003.0002>
- Inubushi, T. & Sakai, K. (2013). Functional and anatomical correlates of word-, sentence-, and discourse-level integration in sign language [Original Research]. *Frontiers in Human Neuroscience*, 7. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2013.00681>
- Poizner, H., Klima, E. S. & Bellugi, U. (1987). *What the hands reveal about the brain*. The MIT Press [手は脳について何を語るか：手話失語からみたことばと脳, 新曜社, 1996年].
- Mori, S. & Sugimoto. (2019). Progress and Problems in the Campaign for Sign Language Recognition in Japan. *The Legal Recognition of Sign Languages: Advocacy and Outcomes Around the World*. Bristol, Blue Ridge Summit: Multilingual Matters. pp. 104–118. <https://doi.org/10.21832/9781788924016-008>
- Nussbaum, M. (2007). *Frontiers of justice: disability, nationality, species membership*. Belknap Press of Harvard University Press [正義のフロンティア：障害者・外国人・動物という境界を越えて, 神島裕子訳, 法政大学出版局, 2012年].
- Rawls, J. (1999a). *A Theory of Justice*. Revised Edition, The Belknap Press of Harvard University Press [正義論：改訂版, 川本隆文, 福岡聡, 神島裕子訳, 紀伊國屋書店, 2010年].
- Rawls, J. (1999b). A Kantian Conception of Equality. In S. Freeman (Ed.), *Collected Papers* (pp. 254–266). Harvard University Press. <https://doi.org/10.2307/j.ctv1cbn3j4.16>
- Safar, J. & Webster, J. (2014). Cataloguing endangered sign languages at iSLanDS. [https://islandscentre.files.wordpress.com/2014/08/report-endangered-sls\\_070814.pdf](https://islandscentre.files.wordpress.com/2014/08/report-endangered-sls_070814.pdf)
- Seelye, K. (2022, April 22). Ursula Bellugi, Pioneer in the World of Sign Language, Dies at 91. *The New York Times*. <https://www.nytimes.com/2022/04/22/science/ursula-bellugi-dead.html>
- Sen, A. (1993). Capability and Well - Being. In N. Nussbaum & A. Sen (Eds.), *The Quality of Life*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/0198287976.003.0003>

- Sen, A. (1982). *Choice, welfare, and measurement*. MIT Press. [合理的な愚か者：経済学＝倫理的探究, 大庭健, 川本隆史訳, 勁草書房, 1989].
- Shew, A. (2020). Ableism, Technoableism, and Future AI, in *IEEE Technology and Society Magazine*, vol. 39, no. 1, pp. 40–85. <https://doi.org/10.1109/MTS.2020.2967492>.
- キム・チョヨプ, キム・ウォニョン (2022). サイボーグになる：テクノロジーと障害, わたしたちの不完全さについて, 牧野美加訳, 岩波書店.
- 田中さをり (2017a). 哲学史の中の聾者と手話：アリストテレスとヴントの視点から, 手話学研究, 26, 11–24. <https://doi.org/10.7877/jasl.26.11>
- 田中さをり (2017b). 音象徴と図像性：日本におけるヴントの手話学説曲解の歴史, 現代生命哲学研究, 6, 1–19.
- 田中さをり (2021). 時間の解体新書：手話と産みの空間ではじめる, 明石書店.
- 田中さをり (2023). 出産と自由：語り得なさをめぐる哲学探究, 現代生命哲学研究, 1–6.
- 高山守, 中山慎一郎 (2021). 画像言語としての手話言語：直観と思考の一体性, シェリング年報, 29, 2. [https://doi.org/10.32297/schellingjahrbuch.29.0\\_2](https://doi.org/10.32297/schellingjahrbuch.29.0_2)
- 高嶋由布子 (2020). 危機言語としての日本手話, 国立国語研究所論集 = *NINJAL Research Papers*, 18, 121–148. <https://doi.org/10.15084/00002544>
- 戸田聡一郎 (2011). 遷延性意識障害におけるケア提供と資源配分に関する倫理的諸問題：日本に特異的な診断基準からの一考察, 生命倫理, 21 (1), 4–11. [https://doi.org/10.20593/jabedit.21.1\\_4](https://doi.org/10.20593/jabedit.21.1_4)
- 戸田聡一郎, 松田三郎 (2018). 無反応性覚醒症候群：PVS 診断名の変遷が生んだ軋轢とその解放, モラリア = *MORALIA*, 25, 79–104.
- 戸田康之 (2016). 日本手話言語条例を実現させて, 『手話を言語というのなら』第4章, ひつじ書房, 37–46.
- 佐々木倫子編 (2012). ろう者から見た「多文化共生」：もうひとつの言語的マイノリティ, 多文化・多言語主義の現在 5, ココ出版.
- 佐野直子 (2006). フランスのろう教育：その歴史と現状, 言語政策 2号, 57–76.
- 中澤操 (2022). 手話で教育：失われた時の復刻を展望する, 日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会会報, 125 (6), 975–985. [https://doi.org/10.3950/jibiinkotoketibu.125.6\\_975](https://doi.org/10.3950/jibiinkotoketibu.125.6_975)
- ハーラン・レイン (2018). 手話の歴史：ろう者が手話を生み, 奪われ, 取り戻すまで, 斉藤渡, 前田浩訳, 築地書館.
- パティ・ラッド (2007). ろう文化の歴史と展望：ろうコミュニティの脱植民地化, 森壮也監訳, 明石書店.
- 本多創史 (2002). 境界線としての「国語」：ろう教育と植民地＝台湾の教育, 一橋論叢, 127 (3), 310–323. <https://doi.org/10.15057/10311>
- 本多創史 (2003). 生誕する「聾者」：新たな身体と精神のその創出過程, 見田宗介, 内田隆三, 市野川容孝編, 「身体」は何を語るのか, 新世社.
- 山田亜虎, 酒井邦嘉 (2017). 増大特集 ブロードマン領野の現在地 ブローカ野における文法処理, *BRAIN and NERVE*, 69 (4), 479–487. <https://doi.org/10.11477/mf.1416200767>